

## 『エゴチスムの回想』と『社会的地位』

高木, 信宏

<https://doi.org/10.15017/2559307>

---

出版情報 : 文學研究. 93, pp.99-118, 1996-03-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 『エゴチスムの回想』と『社会的地位』

高 木 信 宏

スタンダールは、生涯にわたって「自分はなんであるのか」と問いつづけてやまなかった作家である。1801年、18歳のときにはじめられた青年時代の日記では、自己の探究がやがて主要なモチーフのひとつとなり、日常的な経験にもとづく独自の弁証法的な自己認識の方法に帰結することになる<sup>1)</sup>。しかも、「わたしはトラシーの考えに賛成だ。Nosce te ipsum 汝自身を知れ、これが幸福の一源泉である」といった日記の記述にあきらかなように<sup>2)</sup>、スタンダールの自己探究は同時に個人の「幸福」の追求という目的にわけがたく結びついていった。ここから自己の未来・可能性を信じる若き日のスタンダール像を思い描くことができようし、さらに彼の日記が将来の創作活動のための考察や構想が練られる場所であるとするならば<sup>3)</sup>、自らを実験台にすることもいとわぬ文学的な野心を重ね見てもけっして不当なことではあるまい。

いうまでもなく、このような自己探究の特徴は「青年期」という条件をつよく際立たせるものだ。1832年、チヴィタ＝ヴェッキアでなされる自伝の試み、『エゴチスムの回想』の冒頭ちかくで「わたしは自分自身が何者であるのか知らない」という告白がスタンダールそのひとの口から発せられるとき、もはや未来に開かれた自己変革の展望を想像する後世の読者などいやしないだろう。自伝をしたための多くの作家がそうであるように、いかにもテキストの一節にはやがて50歳をむかえようとする作家の晩年の意識が窺い知れるように思えるからである<sup>4)</sup>。つまり、終わりを意識した人間が自己の軌跡をたどりながらこ

ころみる自己認識には、すでに「出来あがった」人間の視点が前提にされているようなイメージがつきまとうのだ<sup>5)</sup>。

さて、われわれが本稿において『エゴチスムの回想』につづく未完の小説、『社会的地位』を取りあげる目的は、1832年当時におけるスタンダールの自己をめぐる一連の問いかけが、じっさいにはどのような展望におさまるのかを考察することにある。はたしてほんとうに、そこでは晩年の意識からのみ自己は見つめられたのだろうか。あるいは、自身の未来への関心や意欲といったなんらかのダイナミックな心境の展開は見いだせないのだろうか。これらの問いを検証するために、まずは『エゴチスムの回想』から『社会的地位』にかけて作家の自分自身への関心がどのように接続していくのかを検討することにしよう。

## I 自伝的な逐語訳

『社会的地位』のテキストは、1904年にはじめてカジミール・ストリヤンスキーにより『スタンダール・クラブの夕べ』のなかでその一部が紹介されたのち、第1次大戦後の1927年によろやくアンリ・デブレによって初版本のかたちで全文が公刊された。ただしその後は、今日にいたるまで当該未完小説にたいするスタンダール研究者の関心はきわめてひくく、現在148号を数える専門研究誌「スタンダール・クラブ」においてさえもこのテキストのみを論考の対象とする論文は見あたらないのが現状である。たしかに小説作品としての価値を問題にする批評家の立場にたつのならば、モーリス・バルデッシュが語ったように『社会的地位』は、「おそらくスタンダールの残した草案のうちでもっとも面白みにかける」ものといえるだろうし<sup>6)</sup>、またこのように不評をかこつおもな理由は、ミシェル・クルーゼが指摘するように小説の素材そのもの——社交界のきどりや、大使夫人とその信心家ぶった打ち明け話を愛の告白と勘違いする外務省の属官とのあいだでくりひろげられる会話——にあるといえるかもしれない<sup>7)</sup>。

しかしながら、かつてヴィクトル・デル・リットによってごく短い書評のなかではあるけれども、『エゴチスムの回想』との関連から『社会的地位』を考察する必要性が説かれたことも忘れてはなるまい<sup>8)</sup>。つまり、この指摘がなされた1975年の段階（現在においてもいえるのだが）では、『社会的地位』のテキストにみられる作家の自伝的な要素にかんするまとまった研究が欠けていたわけである。このことが現象として興味深いのは、『社会的地位』のテキストのなかに作家自身にかんする伝記的な要素が乏しいからではけっしてなく、むしろ「自伝的な逐語訳(mot à mot autobiographique)」とバルデッシュと呼んだように<sup>9)</sup>、反対に誰の目にも作者と対象となっている題材とのつながりがあからさまに読みとれる点にあらう。

では、具体的な検討にはいるまえに、まず小説のあら筋をごく簡単に示すことにしよう――

舞台は1830年のイタリアのローマ。2人の主要登場人物、ロワザンとヴォセー公爵夫人の性格についての考察が提示されたあと、物語は主人公ロワザンがフランス大使館付きの秘書官として当地に赴任してくるところからはじまる。ほどなく彼は大使夫人であるヴォセー公爵夫人と出会い、その美しいまなざしや風変わりな善良さに深く驚き、興味をいだく。半年後、ローマではロワザンについて、新しい宗教の創設をもくろむ者だといった奇妙な評判がたつ。じつのところローマの美しい女性たちの近づきになろうとして途中で挫折してしまい、この2ヵ月というもの女性に話しかけるのをやめていたのだった。彼は自分が相手にされない理由を年齢のせいだと思ひこむ。ほどなく噂を知ってますます人づきあいをさけるようになっていたロワザンの振るまいに、こんどはヴォセー公爵夫人の方が関心をいだく。やがて、ふたりは親しくことばをかかわすまでになるが、ある晩、彼は夫人から心に秘めた恐怖心を打ちあけられる。ロワザンは身分につりあわぬ彼女の信頼や行動を訝り、彼女と親交が深いデッラ・ゲラルデスカ枢機卿を嫉妬させるために利用されているのではないかと彼女の動機

を詮索する。しかしながら、枢機卿と公爵夫人の関係については、炭焼き党員のサヴェッリーの口から意外な真相が語られることになる。この男によると枢機卿は教皇選挙会にからんでフランス大使館に送りこまれたいわば間諜役であり、その戦術は大使の行動に影響力をもつ夫人を搦手とすることにある。だが、枢機卿の自分が公爵夫人に恋しているなどと妙な噂がたつのは不都合。そこで彼女に恋人をあてがう必要があるのだが、じつはうってつけの人物としてロワザンに白羽の矢がたっているというのである。しかも、枢機卿はロワザンが万一のとき夫人をうまく誘導してくれたら、社会的な後ろ楯になると口にしたという。話を聞いたロワザンは真実を確かめるべく自ら枢機卿に近づき、彼が自分の恋敵でないことを確信する。『黙示録』の話題を契機とし、ロワザンは公爵夫人の心を支配しようとするが、彼女が自分に恋をしたのだと勘違いし、勇み足を踏んでしまう。彼女の態度が冷たくなる。じっさいにはヴォセー夫人はロワザンを信仰上の慰め役として必要としていただけだったのだ。

『社会的地位』の草稿の主要な部分は、1832年9月19日から同年10月6日にかけて執筆されている。つまり梗概からあきらかなように、スタンダールは物語の時代背景と舞台の設定を自身のチヴィタ＝ヴェッキア駐在フランス領事としての社交生活に取材しているのである。だが、この未完の小説が「自伝的な逐語訳」と呼ばれる所以は、その点だけにとどまらない。たとえば第1章ではロワザンの経歴が語られているが、そこに見いだせるのは作家自身の人生の軌跡との興味深い類似である。

16になるや、そのようにできあがったこの人物〔ロワザン〕はナポレオンの行動の領域に身を置き、ナポレオンに従ってモスクワやそのほかの国々へ行った。彼が戦場を駆けめぐっているあいだに、父親の方は偉大な人物にならって財産を食いつぶし、破産してしまった。1814年には彼個人もナポレオンの失墜で破産し、旅に出、淡々とした生活をおくることになる。1830年の革命のときに、過去に20年の公務の経験をもつロワザンは退職年金をえることを唯一の目的として書記官の仕事についた。年金をえるには30年

の勤務年数が必要とされていたのだ。<sup>10)</sup>

数字を若干修正しさえすれば、この経歴はそのままスタンダール本人のものとなろう。さらに、主人公と作家の深い結びつきを推測させるものとして、草稿の余白にのこされた作家自身によるメモが挙げられる。同じく第1章のロワザンの性格分析の部分で、スタンダールは「わたし自身のために：一言でいえば、ロワザンは理想化されたドミニックだ」という決定的な証言を残しているのである<sup>11)</sup>。作家が自分自身をモデルに主人公像を練りあげた事実を確認するのに、もはやこれ以上ほかの類似点を指摘してゆくまでもなからう。

なぜスタンダールは当時このような着想をえたのであろうか。言い換えるならば、現在の自分自身を主題として小説を書く意図は何であったのだろうか。ここでとりあげねばならないのが、同年の6月21日から7月4日までのおよそ2週間をかけて執筆が試みられた自伝的な叙述『エゴチスムの回想』の存在であろう。というのも、『社会的地位』のテキストに窺えるスタンダールの自己自身へのつよい関心は、とうぜん前者のなかで試みられた自己探究となんらかのつながりをもつように思われるからだ。

## II 隠蔽された主題

このことを具体的に検討する前に、『エゴチスムの回想』の執筆の状況やテキストの特徴について粗描しておく必要がある。執筆の主な動機としては、すでにわれわれがべつの考察のなかで指摘したように<sup>12)</sup>、当時の書簡や備忘メモから推察できる恒常的な倦怠と老いの意識が挙げられよう。もちろんスタンダールのばあい、暇なので回顧録のひとつでもものにしようか、といった気楽な心境ではなく、無為のうちに精神的に「老い」てしまうことへの恐れが根底にあり、それを克服するために執筆はなされたものと思われる。自分が何者かを知る行為は、とうぜん後世の読者に自分が何者であるのかを示す行為と重な

るわけだが、おそらく自身の生をこえて未来にひらかれる展望を意識することで、作家は直面する「老い」の問題をたとえ一時的にすぎないにせよのりこえようとしたのであろう。

ただし『エゴチスムの回想』では、自己の起源に遡って生の奥深い統一性が語られるという自伝につきものの人格形成の物語が試みられたわけではない。当初の執筆計画では、1821年から1830年11月までのパリ滞在が対象であった。つまり、49歳の作家は38歳から47歳にかけての軌跡を振り返ろうとしていたわけである。周知のように、この時期のスタンダールのパリ生活は外交官としての日常とは正反対に活気と刺激にみちたものであった。サロンでの才気煥発なやりとり、文筆家としての仕事、クレマンチヌ・キュリアルやアルベルト・ド・リュバンプレとの恋愛、これらがスタンダールの生活を鮮やかに彩っていたのである。ところで一般的に考えるならば、華々しいパリ時代の思い出をたどることは、かえって「すでに失われてしまったなにか」をつよく意識させる結果になってしまうのではないだろうか。むしろ、会話を楽しむサロンや恋の相手、あるいは小説執筆のための時間的ゆとり、などといった実生活上の「欠如」ばかりではなく、退屈な日常のなかでスタンダールが危惧している「若さ」の喪失を。なぜならば、かりにテキストが放棄されなかったとしたら、そこではまちがいなく書きつつある今現在の内面の問題、すなわち「老い」への軌跡が主題化されたはずだからである。

ところが興味ぶかいことに、スタンダールは『エゴチスムの回想』のテキストにおいて、反対に内的な「若さ」を強調することでそのような徴候を隠蔽してしまう。

1821年には、わたしはその年頃らしいひたむきな気持ちでこの2人に関心しきっていた（なにぶん、心情的にころりと騙されるという点では、わたしは当時せいぜい21歳の青年なみだったのである）。やがて彼らの正体を見抜いてしまうと、わたしのトラシー氏崇拜も大幅に割引されざるをえなかった。<sup>13)</sup>

青年の常で（1821年といえば、わたしはほんの20歳の青年なみだったことを思い出していただきたい）。これほど先方に心酔しているのだから、彼女も自分に愛情をもってくれてよさそうなものだ、と当初は思っていた。今にして思えば、彼女はあまりにも冷静かつ理の勝ったひとだったし、熱にも情にもやや乏しかったから、かりに恋愛感情があったとしても、2人の仲は長続きしなかったろう。<sup>10</sup>

一見すると、38歳当時、社会的な事象についての自分の洞察力が未熟であったことを誇張しているような印象をうけるが、スタンダールが自身を「20代の青年」にみたてる比喻は、たんに「未熟／円熟」といった人生経験の次元でのみ適用されているのではない。たとえば、虚飾のない素朴なイギリス娼婦との出会いによって、マチルド・デラボウスキーにたいする失恋の痛手が癒された思い出を想起するとき、スタンダールはつぎのように書かざるをえない自分を見いだす。

それは、わたしの孤独な時間をたえず蝕みつつけたあの不幸にたいする、真のそして奥深いところからくる最初の慰めだった。見られるとおりに、1821年には、わたしはほんの20歳の青年だった。洗礼証明書の記すところによれば、当時のわたしは38歳ということになるらしいが、もしその通りの年齢だったとしたら、わたしは好意を寄せてくれるパリの堅気の女性たちを相手に、この種の慰めをえるように努めることもできたはずではないか。<sup>10</sup>

ここでの38歳の自分を20歳の青年にたとえる口調にはいささかも自嘲的なニュアンスは見うけられない。むしろ、青年のように繊細な感受性が弁護されているといえようか。しかも注目すべきことに、スタンダールは49歳の執筆時においても内面の若々しさを依然として保っていると考えているのである。

とはいえ、もしわたしが巧者にたちまわる男だったとしたら、もうとっくに反吐が出るほどに女に飽き飽きしてしまっているはずだ。そしてまた当然、当代人の2典型ラ・

ロジェール氏やペロシャン氏のような人物みたいに音楽にも絵にも飽きてしまっていただろう。そうなるどころか、わたしはおよそ女のことにかんするかぎり、幸せなことに25歳の時と同じように目が眩んでいる。<sup>16)</sup>

このように見てくると、『エゴチスムの回想』における「内心の検討」の過程であきらかに浮上してくるのは、才知や洞察力は円熟したが感情や感受性は昔と変わらないという二元的な精神の特徴だということができよう。また、知性と感情について認識をこころみる過程でスタンダールの心境にすくなくからぬ変化が生じている事実も見逃すことはできない。6月20日の日付をもつ執筆開始後まもない草稿には、「わたしは49歳だ。多くの波瀾を知った今となつては、せいぜい大過なく人生を終えることを考える時節だ」と記されていたのに対して、執筆が放棄される僅か1日前の7月3日には、第2章から移しかえられた部分につぎのような加筆がおこなわれている。

こういうわけだから、何もかも厭になり、人生にも飽きてピストル自殺を遂げるなどということは、わたしのばあい、起こりそうもない。文学者としての生涯でなすべきことは、まだ無数にある。できそうな仕事もたくさんあるし、それは10の人生を満たすに足りるほどだ。1832年の現在、難しいのは、パリの国庫中央経費出納係氏宛に2万フランの手形を振りだすなどという業務のために、仕事への集中を妨げられないようにすることである。<sup>17)</sup>

執筆当初の第1章のなかでは、もはやダイナミックな展開は望めないものとして回顧的な視線の対象であったはずの「人生」が、ここではあらたな創作の意欲のもとに可能性をはらむ展望として捉えられているのがあきらかに認められよう。50歳を迎えようとする年齢にあつて、「感じやすい魂」は依然として青年のように若々しいのであれば、スタンダールの『エゴチスムの回想』執筆の動機にみられた不安は、たとえ一時的にせよ解消されたと推測することもできるのではないだろうか。すくなくとも草稿には、後年パリに住む友人たちに宛

てた書簡のなかで表明されるような「老い」への危機意識や、知性や感情面での枯渇についての恐れを見いだすことはできないのである<sup>18)</sup>。

### Ⅲ 「老い」の主題化

『社会的地位』の執筆は、とうぜんスタンダールの心境の変化と密接な関係にあると考えるべきであろう。このことを確認するために、『社会的地位』における主人公の人物設定に着目したい。主人公ロワザン、この大使館秘書の年齢は、すでに引用した経歴から計算するならば、クルーゼが指摘しているように1830年には50代ちかくに達してなければならないのだが<sup>19)</sup>、物語のなかではいちおう「40歳以上」とされている<sup>20)</sup>。『エゴチスムの回想』との対照で興味ぶかいのは、スタンダールが年齢について主人公につきのような考えを抱かせている点である。ローマの生活をはじめてまもなく、女性たちの美しさに魅了されるロワザンは、自分が同僚たちにむける侮蔑に彼らの若さへの羨望が入り交じっていることに気づく。

かりに彼ら〔同僚たち〕がわたしの考えを見ぬけるのであれば、彼らの方こそ正當にも、わたしを奇妙なやつと見なすことができるのだ。わたしはデッラ・ゲラルデスカ枢機卿の年齢だ。しかしわたしが18のうぬぼれ屋の美青年たちを滑稽だと見なすそのときに、枢機卿をととも若々しくしているこの同じ年齢が、大使館付の秘書を分別くさく、滑稽な人間にしているのだ。

よし、あの美女たちをダイヤモンドのように眺めることにしよう。ダイヤモンドを買えるほどの金持ちではないが、ダイヤモンドはわが目を楽しませてくれる。<sup>21)</sup>

このような決意の後、ロワザンはローマの美しい婦人たちに気に入られようとするが、うまく行かずに計画なかばで諦めてしまう。

「わたしは老いはじめている。それに気づかずにいるのは間違いだ。」<sup>22)</sup>

枢機卿の年齢設定は37歳であり、すでに見たロワザンの年齢とはすこしばかりずれがあるが、いずれにせよ重要なのは40歳前後の年齢と「老い」の自覚がここで結びついて現れている点である。『エゴチスムの回想』のなかでスタンダードがふり返って語りはじめるのは38歳の自分自身であった。しかも、そこで作家がかつての自分の姿に認めていたのは「老い」ではなく、「若さ」にはほかならなかった。では、作家自身の自己を対象化する2作品、しかも形式を異にしつつ連続して試みられた2作品にみられるこのような違いをどのように解釈することができるのだろうか。

現職のチヴィタ＝ヴェッキアのフランス領事がフランス大使館の内情やローマの政治状況をモデル小説で描くという行為は、とうぜん政治的な危険を孕むものであるが、おそらくそうした点に配慮してスタンダードは主人公の年齢の設定に煙幕をはったのだ、とする見方がもっとも妥当であろうか。同様の年齢操作は当時のローマのフランス大使夫人、サン＝トレール夫人をモデルとするヴォセー公爵夫人のばあいにも認められる。1791年生まれのサン＝トレール夫人は1830年には39歳なのだが、ヴォセー夫人の年齢は35歳と設定されている。つまり、主人公たちの年齢はそれぞれモデルよりも5歳前後若くされているのだ。このようなスタンダードの配慮は、作中人物の年齢設定以外にも、たとえばイタリアの枢機卿にかんする記述を草稿では暗号をまじえて書いている点などから推測できるはずである<sup>20)</sup>。とうぜん、設定上の真実らしさの問題がのこるとはいえ、スタンダードは目下の49歳時の心境を40歳前後の作中人物に反映させているのだと仮定することも不可能ではあるまい。だとすれば、ローマの外港に領事として赴任して以来、やはり作家は「老い」を意識するようになったのだ、とする見方はいっそう裏づけられることになろう。

『エゴチスムの回想』の執筆における内的な「若さ」の確認は「老い」の意識に発したものであったと見なすならば、『社会的地位』という小説形式で「老い」の自覚を主題化する目的は、むしろ前者とは異なるものでなければならない。換言するならば、『エゴチスムの回想』でなされた自己認識を方法を

修正して継続するといったものではありえないはずだ。「老い」の意識にすでになんらかの解決をみたからこそ、スタンダールはこの問題を回避することなく主題にすえ、またごく近い過去における自身の内面を3人称の作中人物を介してよりいっそう客観的に対象化し展開することが可能になったと考えられるのではあるまいか。

#### Ⅳ 「老い」と「恋愛」

では、『社会的地位』のテキストのなかで「老い」のテーマはどのようにあつかわれているのだろうか。すでに引用した箇所からあきらかなように、主人公にとって「老い」が問題となるのは女性との関係、すなわち恋愛とのからみにおいてであった。ロワザンは、自分が老いはじめたためにイタリアの女性たちに相手にされないのだと思いこむ。ここで注意しなければならないのは、作家の実生活において「老い」を意識させることになったさまざまな要因、すなわち倦怠きわまる日常や健康面での不安といったものと「老い」の主題との結びつきがきわめて希薄な点である。したがって、小説のねらいは作家の実際の生活の忠実な小説化ではないといえよう。おそらく、「恋愛」と「老い」のむすびつく背景としては、『エゴチスムの回想』第11章のなかでなされた、「わたしはおよそ女のことにかんするかぎり、幸いにも25歳の青年並に眼が眩んでいる」というスタンダールの認識に注目すべきではないだろうか。つまり、『エゴチスムの回想』執筆の結果、スタンダールにとって2つの主題の連関が小説のアイデアとしてつよく意識されたのではないかと推測されるのである。

この点にかんして示唆的なのは、先述のロワザンのせりふの前後におかれてある語り手による分析である。

フランスの小説があたえる考えで頭がいっぱいのロワザンには、自らの不首尾の原因がすこしもつかめなかった。

「わたしは老いはじめている。そのことに気づかないのは間違いだ。」

そして、このまことしやかな理屈のおかげで、2カ月のあいだ、彼は女性たちにほとんど話しかけなかった。おそらくいかなる頭の持ち主とはいえ、この頭より判断力を欠いたものはなかったろう。<sup>20</sup>

一見すると、ここでの「老い」は外見的なレベルで問題となっているかのである。というのも、たしかに異性の出会いの情景において視線というものを特権化するのとは小説の常套手段であり、ロワザンがそう考えてもごく自然な印象をうけるからだ。また、それは『エゴチズムの回想』のような「内心の検討」においてほとんど省みられることのない側面であるだけに興味深くもあるのだが、しかしながら語り手の説明によって強調されているのは、主人公が女性関係で分別をなくす、ということに過ぎない。このロワザンの性格はべつの箇所ですまびらかにされている。

政治や戦術など深刻な事柄において、ロワザンがはっきりと遠くまで見きわめることができるのは、彼がそれらにほとんど関心をもっていないからである。つまり、熱がないのだ。しかし、自分が良く思う女性がかかわる話のばあい、彼の心はあたかも18歳のときのように常軌を逸してしまうのだった。滑稽なのは、彼が自分の年齢のおかげで自らをたいそう賢明だと思いこんでいることである。じっさいは年齢のために、彼は好ましい女性を征服する喜びを誇張して考えているにすぎない。<sup>20</sup>

ミッシェル・クルーゼは作家についての大部な伝記的著述のなかで、ロワザンの例を引きあいにしたしながら、スタンダールにとって「老い」が最悪なのはいわば外見のレベルの問題ではなく、「老い」が中傷的で冷淡な考えをもたらし人を気難しい性格にかえるからだという旨の解釈を述べているが<sup>20</sup>、はたしてそうであろうか。なるほど「老い」が外面的に扱われているのではないという点では異論はないが、われわれにとって『社会的地位』とは「老い」を恋の障害だと思い込んでしまった男の物語にほかならず、「老い」のもたらす性格そ

のものが主題化されているとは思えないのである。なぜならば、この引用文からあきらかなように、語り手によって示される主人公の内面は、『エゴチズムの回想』のなかで肯定的に確認されたスタンダールの「25歳の青年」のような心のあり方ときわめて類似したものだからだ。しかも、「古い」の自覚について主人公の錯誤を指摘する語り手の役割に注目するならば、ここには『エゴチズムの回想』によってえられた作家のあらたな認識が反映されていると考えるべきであろう。換言するならば、『社会的地位』執筆時においてスタンダールは自身のごく近い過去の思い込みを反省的に捉えていると思えるのだ。

ヴォセー公爵夫人に愛されたと早合点する場面で、ロワザンの思い惑うありさまが内的独白のかたちで展開されているが、ここに「古い」の主題を読み解く鍵が隠されているようだ。

「公爵夫人を楽しませてやろうと、いやむしろ若い頃の武器をまだうまくあつかえるのかどうかためてみたいと思ったが、しかしやがて信心にこりかたまってしまふ女に、いやすでになにかにつけ、「それは道徳にかなってます」とか「それは背徳です」とか口にする女に好かれるなんて、ほんとうにいやだ。〔…〕ヴォセー夫人は35歳だ。このわたしが35歳の女を、しかも5年後には40歳になる女を悦ばす役を引き受けるなんて、まっぴらごめんだ。〔…〕

ヴォセー夫人に好かれているとひとたび確信すると、ロワザンは自分がローマの美女たちにもてなかつたことを思い起こし、笑いながら考えた。

「どんなに自分の才能が優っているとはいえ、わたしは老いつつある。もはやあのような手練手管は、わたしのためにあるのではない。それにしても、多すぎて選ぶのにもっぱら困るばかりではないかと心配して恋の国に来ていながら、ただのひとりのローマ女性の手を握ることすらままならないとは皮肉なものだな。」<sup>27)</sup>

いうまでもなくロワザンは公爵夫人をリベルティナーージュの対象として捉えている。その意味で、この人物が「古い」を意識してしまうのもある種の社会的な通念、ドン・ファン的な幻想に囚われている結果だといえる。ここで公爵夫人の年齢が問題にされているのも、誘惑者の視点を読者にたいしてあきらかに

示すためにほかならない。作家がつぎのような記述を小説の冒頭ちかくに置くのは、むしろその伏線である。

しかしながら、われわれの物語がはじまる時代には、ヴォセー夫人はもはや女たちが誘惑されることのない人生の時期に達していた。うぬぼれ屋や手練の誘惑者たちは、勝利や勲章とするにはそのような女たちがあまりにも年をとっていると思なすものである〔…〕。<sup>28)</sup>

スタンダー自身はこのようなりベルタンにはなれなかった。自分は叔父ガニョンのような恋の戦略家には不向きで、結果的にはそれが幸いし49歳になっても青年みたいに女に目が眩むのだ、という『エゴチスムの回想』第11章の記述を思い起こされたい。すると、作家自身をモデルとする主人公もまた、本物の誘惑者として設定されていないのではあるまいか<sup>29)</sup>。

たとえロワザンは35歳ということばを口にしたとしても、公爵夫人はまだ人から愛されるのに充分ふさわしいように彼には思えた。たしかに、彼女は感情のなかに無邪気さをもちあわせているし、大多数の女たちの頬に皺をつけるあの卑俗な慎重さといったものをまったくもっていないかった。また彼女に35歳という年齢を認めるためには計算したり、彼女の子供たちの存在を思い起こしたりする必要があったのも本当である。夫人のあまりにあどけなく美しい目は、すでにロワザンの心を完全に魅了してしまっていたのだった。とりわけ2人だけになって、彼女がまなざしに感情のニュアンスを思わずあらわしてしまうようなとき、その目は抗しがたいものであった。

ロワザンの心の奥底で、慎重さという弁護士がふたたび35歳という致命的なことばをくりかえそうとしたときに、希望と幸福の弁護士が反駁した。

「わたしの方も初老の男ではないのか。ローマの美女たちが、自分にそのことをはつきりと分らせてくれたばかりではないか。」<sup>30)</sup>

いうまでもなく、「まなざし」のモチーフはスタンダーが情熱的な恋愛を形象化するときにもちいる常套的な手法であるが<sup>31)</sup>、『社会的地位』のテキスト

においても、ロワザンとヴォセー公爵夫人との出会いから2者の接近にいたる過程を描くさいにしばしば織りこまれている。ここでは「まなごし」を介在して、年齢をめぐる誘惑者の葛藤の水面下にある、恋の動機と可能性がしめされているとは考えられまいか。

このあとつづいて、夫人から愛の告白を引きだそうとするロワザンの姿が描かれるが、スタンダールはアイデアに行きづまったのであろうか。女主人公の冷やかな態度に主人公が自分の考えちがいを気づくところでテキストは中断されてしまう。その後なんとなく草稿は読みかえされ、部分的な修整がほどこされたり、いくつか筋立てなどの案が書かれたりもするが、ふたたび執筆のための熱は作家のもとには訪れなかった。プランのひとつでは、小説の結末は公爵夫人の冷やかな態度の理由を知ったロワザンが彼女にあらためて恋心を抱くことになっている点から考えて<sup>32)</sup>、スタンダールはドン・ファン的な幻想から醒めた主人公の心理を描くつもりだったのではないと思われる。いずれにせよ、作家はこれまで見てきた主人公の性格を文学的にみて「新しいもの」と考えていたようである<sup>33)</sup>。

## V 感じやすい魂

さて、以上の考察からスタンダールが『社会的地位』のなかで展開しようとしていたのは、「古い」のもたらず一般的な性格の特徴ではなく、作家自身の青年のような内面をモデルにした新しい個別的な性格であるのがあきらかになったと思う。このような性格にもとづく恋愛にからめながら、1830年代はじめの貴族やブルジョワジーや僧侶といった諸階級の行動原理が解説されてゆく、そのような小説が予想されるのだが、残念ながらテキストは未完のまま放棄されてしまった。それでは、この新しいとされる性格が具体的にはどのようなものであるのかをさらに検討してみることにしよう。『エゴチスムの回想』のなかでスタンダールは自身の性格の特徴をつぎのように語っていた。

友情においても恋愛においても、最初の幻滅がくるまでは、わたしは激し、熱し、狂し、過度の真卒さに陥る。が、いったん醒めると、わたしは瞬間に16歳の狂気から50男のマキアベリズムへと一転し、一週間もたてば残るものは溶けてゆく氷、つまり完全な冷淡さあるのみだ（以上のことは、つい最近も Lady Angelica との関係で経験したところ。1832年5月のことである）。〔強調はスタンダール〕<sup>34</sup>

作家は1821年当時の自分をかえりみながら、自身の性格はいまも変わらないと語っているのだから、このような心理パターンが老いの徴候として語られているとは考えられまい。レディー・アンジェリカが誰なのかは今もって同定がむつかしいが<sup>35</sup>、この「経験」が小説に生かされていることは、公爵夫人の「死」にたいする恐怖心がロワザンに打ちあけられる第2章の挿話のなかで、これと類似した構図が主人公の心理の推移に組み込まれている点から容易に見てとることができる。

ロワザンはこの信頼に気づき、そのことに感謝した。それは公爵夫人という身分に由来するあらゆる不信にたいして大きな一撃をあたえたのだった。彼は夫人にすばらしい容貌をみとめた。瞬間に自分が魅了されてしまうのを彼は感じた。この時、彼女の年齢から引き出された、公爵夫人を愛することへの抗弁が、彼の心から永久に追い払われてしまった。

彼女はことばをつづけた。〔…〕

公爵夫人のまなざしが自分にもたらすあまりの感動に、彼はほんらい自らの役割が求めるような返答をするかわりに、彼自身にとって真実であることを述べながらことばを返した。<sup>36</sup>

ここでのふたりの会話は「死」と死後の審判をめぐるものだが、ちなみに1832年5月前後といえばフランスでコレラが猛威をふるっていた時期であり、著名人をはじめ多くの犠牲者がでていただけに、当時の大使館の話題としてはさほど突飛なものではあるまい。じっさいスタンダールも万々に備えて、パリにいた友人のプロスベル・メリメに治療法を尋ねたぐらいである。

このあと、すっかり興奮し取り乱した夫人の口からつづけられる奇妙な告白

に、ロワザンは「見せかけ」を感じるや、熱から醒めて夫人の動機を分析しはじめののだが、以上のような主人公の一連の心理過程にみられる構図が一般には理解しがたいものと懸念したのか、作家はあらかじめテキストの冒頭部分で「見せかけ」にたいする主人公の敏感さを示している。

心の琴線にふれる言葉、街角で耳にしたり、職人の店で偶然でくわす不幸の偽りなき表現、こうしたものにロワザンは涙をみせるほど心動かされるのだった。しかしながら、苦悩の表現にほんのわずかの誇張や、あるいは見せかけのおそれがすこしでもあると、もとの動機がいかに正当なものであろうとも、ロワザンの言葉にはもはやこのうえなく辛辣な皮肉があるばかりであった。<sup>37)</sup>

ではなぜスタンダールは、小説のなかで「16歳の狂気」から「50男のマキアベリズム」へと変貌する性格を描くために、このような他者の虚偽を問題化するのだろうか。じつは、これらの結びつきは『エゴチスムの回想』に遡って見られるものである。第6章のイギリス娼婦の挿話、そこでは虚飾のない娘の無邪気さに自らの心を開くスタンダールの姿が描かれているが、この挿話につづいて語られるのは、まさしく虚飾のわずかなニュアンスにも傷つく作家の心にほかならない。もはや主人公ロワザンに移植されているのが、晩年をむかえる男の心理的メカニズムなどでないことはあきらかであろう。スタンダールはいわば自らの風俗批評の原理をなすものをあたえようとこころみたのである。しかも重要なことに、作家は『社会的地位』の執筆時にはすでにこの原理の形成が青年期に終わっていたことに充分自覚的だったと思われる。というのも、先の引用箇所につづいて、16歳のときには主人公は「そのようにできあがっていた」と語られているからだ。そうであるならば、スタンダールは16歳から49歳にいたるまで一貫して変わらぬ独自の「感じやすい心」のメカニズムをこの小説のなかで展開しようとしていたのだ、といってもけっして過言ではあるまい。

## 結 語

『エゴチスムの回想』の執筆は、スタンダールに自己の同一性についての積極的な認識をもたらした。そのような認識を根底にふまえてなされた『社会的地位』の創作は、たんに現在の自己像にナルシシスチックに見いってなされたとはいえず、むしろ自己をモデルにあたらしい文学的な主題の可能性をさぐる試みとして位置づけることができよう。『エゴチスムの回想』の放棄される契機となったのが、人生の展望についての積極的な認識であり、また自己認識から創作へとむかう作家の歩みが「古い」や晩年の意識にたいする抵抗の軌跡であることを併せみるならば、スタンダールが『アンリ・ブリュラーの生涯』の執筆にいたるまでの過程はけっして直線的なものではない、そうとりあえずいえるのではあるまいか。

ところで『社会的地位』は、たとえ完成されたとしても、とても作家の生前に発表できるたぐいの小説ではなかった。そのスキャンダラスな内容にたいして当然予想される各方面からの反応は、スタンダールの意欲をそぐに充分足りるものであったろうと思われるが、より以上に作品のゆくすえに重要な影響をおよぼしたのは作家の身边でおきた事件の方ではなかつただろうか。1832年10月6日、執筆が中断される。これはアンリ・マルチノが指摘するように<sup>38)</sup>、ジュリア・リニエリ＝デ＝ロッキが、後見人ダニエッロ・ベルリンギエーリに伴われてパリからイタリアのフィレンツェに到着した時期と一致する。ジュリアとの関係が破局をむかえるのは、同じ年の12月なかば前だとされている。スタンダールは心の痛手を『社会的地位』の推敲でまぎらわそうと筆をとるが、結局12月12日になされた推敲が事実上最後のものとなる。そして、翌年の6月24日の彼女の結婚の日をさかいに、小説にたいする意欲は薄れていったようである。では、このように一見して並行している、ジュリアとの関係と『社会的地位』創作の経過であるが、両者のあいだになんらかの密接なつながりがあるとしたら、それはいったいどのように説明できるのだろうか。この興味ぶかい問

題の検討をつぎなる考察の課題とし、ひとまず本稿を終わることにしたい。

註

- 1) Voir Victor DEL LITTO, «Préface» de *Stendhal, Œuvres intimes I*, édition établie par V. DEL LITTO. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1981, pp. XII-XIII.
- 2) STENDHAL, *Journal 1818-1942*, in *Œuvres intimes I*, *ibid.*, p. 362.
- 3) Voir Béatrice DIDIER, *Stendhal autobiographe*. Paris: PUF, 1983, pp. 60-61.
- 4) 「こんなことを言えば、分別のある人は、自分自身に打ち勝たねばならぬなどと答えるだろう。わたしはこう言い返す。— もうおせい。わたしは49歳だ。多くの波瀾を知った今となつては、せいぜい大過なく人生を終えることを考える時節だ、と」 STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, in *Œuvres intimes II*, Paris: Gallimard, coll. de la «Bibliothèque de la Pléiade», 1982, p. 430. なおこの作品の引用には富永明夫訳『エゴチスムの回想』（富山房百科文庫, 1977年）の邦訳を使わせていただいたが、文脈によっては筆者が改変をほどこした箇所がある。
- 5) Voir Georges BLIN, *Stendhal et les problèmes de la personnalité t.I.* Paris: José Corti, 1953, pp. 4-5.
- 6) Voir Maurice BARDECE, *Stendhal romancier*. Paris: La Table ronde, 1947, pp. 240-242.
- 7) Voir Michel CROUZET, «De l'inachèvement», in *Stendhal: Romans abandonnés*. Paris: Union générale d'éditions, coll. «10/18», 1968, p. 36.
- 8) Voir Victor DEL LITTO, «Carnet critique», in *Stendhal Club*, n° 69, avril 1975, p. 80.
- 9) Maurice BARDECHE, *op. cit.*, p. 240.
- 10) STENDHAL, *Une position sociale*, in *Stendhal: Romans abandonnés*, *op. cit.*, p. 116. 『社会的地位』の引用にあたっては同版のテキストを使用した。邦訳の文章は拙訳による。
- 11) *Ibid.*, p. 158.
- 12) 拙論「感受性と自己認識——スタンダール『エゴチスムの回想』管見——」, 『ステラ』第14号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 1995年3月, 69-75頁を参照されたい。
- 13) STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, *op. cit.*, pp. 458-459.
- 14) *Ibid.*, p. 492.
- 15) *Ibid.*, p. 486.
- 16) *Ibid.*, p. 519.

- 17) *Idem.*
- 18) STENDHAL, *Correspondance t. II*, édition établie et annotée par Henri MARTINEAU et V. DEL LITTO. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1967, pp. 711-712.
- 19) Voir M. CROUZET, *op. cit.*, p. 38.
- 20) STENDHAL, *Une position sociale*, *op. cit.*, p. 115.
- 21) *Ibid.*, p. 121.
- 22) *Ibid.*, p. 122.
- 23) *Ibid.*, p. 110.
- 24) *Ibid.*, p. 122.
- 25) *Ibid.*, p. 129.
- 26) Voir M. CROUZET, *Stendhal ou Monsieur Moi-même*. Paris: Flammarion, 1990, p. 554. 「古い」に由来する行動を示すものとして、クルーゼはロワザンがローマの女性たちから遠ざかる例などを挙げている。が、こうしたいわば主人公の「孤立」のテーマはスタンダールの他の小説、わけても『アルマンズ』に認められるものであろう。われわれには「古い」よりもやはり「恋愛」の主題系に属するものと考えられる。
- 27) STENDHAL, *Une position sociale*, *op. cit.*, p. 154.
- 28) *Ibid.*, p. 115.
- 29) Cf. M. BARDECHE, *op. cit.*, pp. 240-241. バルデッシュはこの作品における「ドン・ファン的性格のテーマ」を『赤と黒』に通じるものであると指摘している。
- 30) STENDHAL, *Une position sociale*, *op. cit.*, p. 155.
- 31) 拙論「スタンダールの小説における <まなざし>」, 『ステラ』第10号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 1991年10月, 17-36頁を参照されたい。
- 32) STENDHAL, *Une position sociale*, *op. cit.*, p. 163.
- 33) *Ibid.*, p. 177.
- 34) STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, *op. cit.*, p. 493.
- 35) Voir STENDHAL, *Une position sociale*, *op. cit.*, pp. 111-113.
- 36) *Ibid.*, pp. 133-134.
- 37) *Ibid.*, p. 116.
- 38) Voir Henri MARTINEAU, *Le cœur de Stendhal t. II*, Paris: Albin Michel, 1953, p. 253.